

草の芽句会だより

NO,161
22 ,1,6

雪催い雲のかかりて讃岐富士
初句会天守を仰ぎめぐりけり
貞子

うから等の共に八十路や春迎ふ
一人居の婦人会よりおせち届く
節子

散り敷ける山茶花の中帰厚の碑
崩落の石垣修理初時雨
純子

御降にあまねく潤う城の道
葉牡丹に小さき露のころころと
範子

初句会師の句碑訪ね城巡る
着ぶくれて句友二人と城の径
禮子

年新た今の心を守りたし
初空を映して濠の水静か
剋子

オンライン通話で孫と初笑い
餡餅のお礼賀状に添えてあり
文子

庭めぐり近づく春の香りかな
冬雲の白さ流れの速さかな
芳子

出席者 川原 氏家 森 馬場 吉崎 小山
投句者 大黒 小林

今日は新年初句会。城山は曇り空だが、朝からそれなりの人出である。ニュースでは、又コロナが広がりそうだとか、マスクが放せない。いつもの径を辿ると花壇の葉牡丹が鮮やかに色づいて通る人達を楽しませている。濠沿いのベンチに腰を掛けると正面に端正な姿の飯野山が。「淑氣」という言葉が頭を過り、お正月らしい気分になる。

部屋に戻ると、馬場さんがお抹茶の用意をしてくれて皆大喜び。「お茶碗重かったやろ」「初句会の雰囲気であるなあ、いつもありがとう」「お菓子もようけあるで」と、盛り上がる。歳を重ねるに従い、天守閣まで上るのが億劫になってきた。スイスイと駆け上がった昔が懐かしい。「頭も身体も衰えたけど、まだまだこのメンバーと俳句を続けたい」皆の想いである。今年も元気で城山を歩こう。木々が、花が私達を待っていてくれるのだから。

